菅田庵・一畑薬師本坊庭園にみる「本歌取」の技-

林　秀 樹

1 はじめに -庭づくりの時代背景-

江戸・明治時代など過去に培われ、今に残された技術を探査・探究しようとするときは、その地域の文化伝承と時代背景を考慮して評価することが大切。出雲の庭づくりもその一つである。

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、1890 年(明治 23 年)、英語教師として松江に赴任した。松江の自宅の庭について、「日本の庭で」で次のように述べている。

> 「松はまた、この象徴の国では、象徴的な意味を持つ。常緑樹の故に、松は不屈の意志と老いてなお旺(さか)んな老年の表象である。針の形をした葉は魔除けの力があると信じられている。」

出雲流庭園は常緑樹の庭、その中心には必ずクロマツを植える。出雲の人々は、この松を今でも「高砂（たかさご)」呼び、真木(神木)として尊び崇める。約一年の滞在で出雲の伝統文化を幅広く書き残した小泉八雲に感服するばかりである。

小泉八雲旧居庭園　松江市
・元は武家の庭、小泉八雲著「日本の庭で」の舞台
・細やかな観察眼で、日本の庭の魅力を紹介

小泉八雲が著した「神々の国の首都」では、外国から来たばかりの新鮮な目で出雲の人々の暮らしを観察している。江戸時代末期から明治時代は、出雲流庭園が盛んに造られた。その頃の時代背景を知る恰好の書物であると思っている。

出雲では、庭づくりについて記録したものはほとんど見あたらない。図や文字で残さなかったのである。なぜ、このような庭を作ったのか。その謎解きは、簡単ではない。丁寧な観察と地誌や文化伝承を探り、「なぜ、何のために」と言う問を何度も繰り返し、その答えを探る日々である。

これまでも述べてきたことであるが、本稿の作成にあたって、参考とする文献は少ない。個人的な意見、勝手な想像と言われるかもしれないが、独り合点して書き進めることをお許しいただき、楽しく読んでいただけたらと思っている。

2 庭づくりと「本歌取り」

本題に入る。

菅田庵と一畑薬師本坊庭園では、江戸や京都の庭を「本歌」とした庭づくりの手法を見ることができる。本歌取りである。出雲が京都や江戸との交流が盛んであった証左であると考えている。

まず、本歌について説明する。本歌は、もともとは和歌の世界の言葉。広辞苑によると「和歌などで意識的に先人の作の用語・語句などを取り入れて作ること」とあり、典拠となった元の歌を本歌と呼んでいる。

その言葉が波及して茶道具・茶室・庭園などで使用される道具などで、起源となるものを「本歌」、その意匠を模倣、翻案したものを「写し」と呼ぶ。

本歌取りとは、単なる複製ではな句、独自性を持つ。庭園においては、特に石灯籠や手水鉢で本歌を語ることが一般的。

右の石灯籠は、庭の定番「柚木灯籠」。本歌は、奈良市春日大社の柚の木のそばにあったことから柚木の名。平安時代後期の作といわれ、劣化が進んでいることから、室内に移転、厳重に保管されている。春日大社の歴史ある灯籠で火袋が八角形と珍しく、各地の庭園に「写し」が据えられている。

手錢記念館の石灯籠と本歌を比べると、基本的な意匠は似かよってはいるが火袋の図柄が異なる部分もある。

本歌の石灯籠より写しが端正に見えるのはひいき目だろうか。

柚木灯籠
左 写し：出雲市大社町 手錢記念館
右 本歌：奈良市春日大社（重要文化財・室内保存）

庭園では、本歌取りの手法を石灯籠などに限定せず、庭全体の意匠が「本歌取り」のものもある。安来市の城安寺庭園は「雪舟写しの庭」と呼ばれるのは、まさにその例。

本歌は不明な庭の代表が出雲流。出雲流庭園は、「おもて」に面した枯山水。常磐木の庭で石灯籠や手水鉢の配置にもこだわり、一定の様式を守る様式美の庭である。その数は千を優に超えるがこれが「本歌」と覚しき庭は見あたらない。

典型的な出雲流庭園
小村亭 出雲市大社町

菅田庵と一畑薬師本坊庭園の本歌取りに話を戻す。

菅田庵は松江藩七代藩主松平治郷のために開設した不昧公好みの茶苑。藩主としての 39 年の間に参勤交代を行い、19 回松江と江戸を往復している。参勤交代の途中で見聞きした庭づくりの技を菅田庵に取り入れたと考えてもおかしくないであろう。

一方。一畑薬師は、宗派は臨済宗妙心寺派。本山のある京都には多くの僧が修行に行き、京都からも古刹である一畑寺を訪れる高僧も多かったに違いない。

そのことから、菅田庵は江戸と京都の庭づくりをお手本にし、一畑薬師本坊庭園は交流の深かった京都妙心寺の庭の本歌取りが秘められていると考えている。

この二つの庭づくりの手法は、その後飛躍的に発展する出雲流庭園に大きな影響を与えたと思っている。出雲の人々にとって、それまでの庭とはお寺の庭。池を中心に三尊石や鶴亀が据えられた池泉式。一方は、枯山水の平庭。砂利を敷き詰め短冊形の延段や飛石を配した庭である。水の取り入れが困難な出雲の平坦な地形、曇天が続き湿気の多い気候風土に合致した庭として二つの庭が評価されたと思っている。

2 京都ゆかりの橋杭型手水鉢

菅田庵と一畑薬師本坊庭園では、「橋杭型手水鉢」が庭の好手。京都の庭の本歌取り。代表的な縁先手水鉢として京都で人気を博し、全国各地の庭園に広まった。鴨川に架かる橋の御影石橋脚を転用したものとされている。

橋杭形灯籠
上：松江市菅田町 菅田庵
右：江戸時代作庭書 築山庭造伝

京都の三条大橋と五条大橋は、日本初の石柱の橋脚。天正17 年(1589 年)、豊臣秀吉が洪水に耐える強固な橋とするため、木製の橋脚を御影石に取り替えた。当時の記録では、基礎は地中 9.1 メートル埋め込まれ、石柱は 63 本とある。残された絵図等から、石柱をつなぐ横桁は一本。江戸時代、たびたび洪水に見舞われ、木製の上部は流されるが、御影石の橋杭は残った。

この橋杭を転用して手水鉢としたとの言い伝えは、まさに伝説。橋の上部は流されても杭のほとんどは残ったというので、橋杭を取り替えることも少なかったと考えている。さらには、この手水鉢には、必ず横桁の受けが取り込まれている。三条、五条大橋の橋杭をすべて交換したとしても、80 本程度。このことからも、ほとんどの手水鉢は鴨川の橋杭を模造したもの。

全国に庭で使われることになったのは、洪水に耐え、清らかな鴨川の水で洗われた橋杭を手水鉢に加工し、新鮮な水でみたす。庭の軒先手水鉢としたのは、けがれを落とし、邪鬼を防ぐ、除災招福にあやかったのではと考えている。

3 京都銀閣寺に倣う（ならう）月光を崇める技

菅田庵と一畑薬師本坊庭園には、庭の境を示す生垣などが見あたらないのが大きな特徴。裏山を後背地に持つ寺院庭園を除くと、出雲地方では希有な庭である。

菅田庵の向月亭は、銀閣寺の向月台と同じ趣向、一畑薬師は、薬師如来の脇侍は日光菩薩と月光菩薩、お寺のホームページにもすばらしい日の出、月の出を掲載。

そのため、月が昇る東から南には垣を作らない。月光で庭をあまねく照らす、そのため、月の光を遮る垣を作らず、庭一面を銀色の海に見立てたいとの願いから名のだと思うと、一人合点して頷く。

この二つの庭を、室町時代に造営された銀閣寺の向月台と銀沙灘を本歌と仮定すると菅田庵と一畑薬師本坊庭園は、本歌取り。

銀閣寺は東山の麓の庭、山影となり、月を崇め愛でる時間は少ない。月の光を取り込む仕掛けとして、向月台や銀沙灘を造り上げている。菅田庵と一畑薬師本坊庭園は、南東から南西まで天空を取り込んでいるため、緑の海原や宍道湖の水面で月光を愛で崇めたのではないだろうか。

京都市 銀閣寺：銀沙灘、向月台
銀沙灘：本堂と銀閣の二層から月光を崇める
向月台：銀閣（観音堂）の一層から月光を崇める

菅田庵の大苅込は奈良の慈光院の庭の本歌取りと伝えられる。サツキの大苅込が菅田庵のカシの大苅込の「写し」という。

慈光院は、武家茶道の一つ石州流の宗元、境内全域が茶席として造営され、サツキの名所としての名高い。

写真は、菅田庵向月亭の正座から眺める絶景。低く刈り込まれたカシの緑の海原が広がる。

石灯籠の棹を隠すサツキの苅込は、もしかしたら慈光院にあやかり、後に植えられたものか。

本来はサツキの植え込みはなく、カシの大苅込だけではなかったか。なだらかに下る地形に配慮したことに加えて、出雲流「常磐木の庭」にこだわりカシを群生させたと考えることはできないだろうか。向月台にあやかり、銀閣寺の高生垣がカシとツバキであることから、カシを使ったのではと妄想は広がる。

菅田庵「向月亭」正座から南を見る
・南中頃の月は、南の空高く上がる
　正座から「観月」は困難なので「向月」
・砂庭との境の石灯籠は、闇夜を照らす

今は、眺望の先にビル群が見えることから大きな木で一部分を隠しているが、かつては全面が緑の海原。月の光に照らされると銀色の海が広がったのではないだろうか。

本歌取りは単なる模写ではないことは先にも述べた。本歌の趣向を取り入れて、その時代や風土創意を加味した独自性を発揮することが大切である。

丁寧に見ると、観月亭の庭先、砂庭との境に石灯籠が据えられている。夜半、お茶をたしなむ時間、南の空から月光が降り注ぐのは、満月の前後の 10 日間程度。月光の届かない日には、石灯籠の明かりが緑の海原を照らすという趣向。想像するだけで楽しい。

一畑薬師本坊庭園は、大きく広がった天空を持つ庭。庭に出れば日の出、月の出を楽しめる庭。本坊の正座からは、東から南まで眺めることができ、菅田庵より長い時間月の光を楽しめたのではないだろうか。

4 菅田庵「鬼門封じ」と六地蔵灯籠

菅田庵は多くの謎が秘められている。

・なぜ、城外に作られたのだろうか。鷹狩りのための茶屋から派生したか。

・なぜ、周囲に垣や塀がないのだろうか。立派な門があるにもかかわらず。

・なぜ、六地蔵灯籠の二面をくり抜き、四地蔵にしたのか。それはいつか。

など数えれば枚挙にいとまがない。

菅田庵の鬼門封じについて私論を述べる。あくまでも私論であり、他の文献等で検証されたものではないことを、あらためて確認し話を進める。

出雲では南西方向、裏鬼門を畏れ、庭の南西端に巨大な立石や塔を据える。しかし、出雲屋敷のお祓いがあることも関係するだろうが、出雲の人々が屋敷の北東、鬼門封じについて語ることは少ない。

ところが、松江藩主となった堀尾家・松平家は、他の地方からの移住者。京都や江戸で重視されていた鬼門封じの伝承を携えて松江に来たと考えている。

松江城の築城にあたっては、鬼門にこだわり、千手院を広瀬富田城下から移設した。天守閣の北東に建立、鬼門封じの寺としている。

その千手院と天守閣の延長線上に菅田庵がある。菅田庵には、松江城の鬼門封じの策が秘められていると考えると、単なる茶席以上の役割が見えてくる

六地蔵石幢
（京都市：橋本関雪記念館）
灯を灯す火袋に空無し

菅田庵には、屋敷の北東（鬼門）と南西（裏鬼門）には六地蔵が据わる。ここでは六地蔵灯籠と呼ぶが、火袋のように灯をともす空間がないことから、正しくは「石幢」。

ところが、今も元の六地蔵石幢の姿はなく、大きく改造。菅田庵の北東、鬼門側の六地蔵石幢は塔身を取り除き、龕部を石仏のように地表に下ろしている。

南西（裏鬼門）側の石幢は、六面の内二面の地蔵をくり抜き四地蔵とした。龕部（がんぶ）を火袋状にし、石幢から灯籠に変身させている。その証拠に、くり抜かれた四角窓の下には地蔵の脚。

この六地蔵と同じように二面が彫り抜かれた石灯籠が、東京国立東京博物館庭園に据えられている。ここで六地蔵石幢を四角窓ではなく円窓に彫り抜いている。地蔵の顔と衣が残る。

六地蔵石幢から塔身を取り除き、石仏
・菅田庵の北東（鬼門）の境界を守る
・来待石製、松江の石工がつくったか

東京国立博物館は、元は、上野寛永寺本堂跡。寛永寺は、神田明神と共に江戸城の鬼門封じのため建立された。

寛永寺建立よりずっと後に建てられた菅田庵。参勤交代で江戸を往復した不昧公が、上

野寛永寺の六地蔵石幢を松江にも据えようと考え、来待石の石工に加工させたと考えている。これこそ江戸の鬼門封じ、邪鬼封じの本歌取りだと、一人頷く。

六地蔵は、道祖神信仰と結びついて、結界で邪鬼などの侵入を防ぐ。出雲地方でも村の入口や寺の山門付近などで今も多く見られる。一般的な六地蔵は、六体の地蔵は並列に並ぶ。六地蔵が力を合わせ、邪鬼の侵入方向をにらみ、守護するのである。

六地蔵石幢の龕部をくり抜いた石灯籠（石幢から石灯籠に変身）
右　東京国立博物館庭園（旧上野寛永寺本坊跡）
左　松江市菅田町　菅田庵

ところが、六地蔵石幢は、六面体で六方をにらむ。結界の外だけでなく、村内や寺院内にもにらみをきかせている。不思議な六地蔵である。出雲では見ることはほとんど無い。全国的もその数は少ない。

それでは、なぜ、六面に彫られた地蔵像のうち、二面をくり抜いたのだろうか。そして、それはいつのことだろうか。

詳細な解明はこれからであるが、時期は明治の初め、政府が迷信として排斥した庚申信仰と関係があると考えている。

昔の姿で残された六地蔵石幢が現在も残されているところがある。塔身に「庚申供養」との願文が刻まれているものもあり、六地蔵石幢は庚申信仰の証と考える理由である。

取り壊しすべきだという命がでたのであろうか。危殆に瀕した六地蔵石幢を守るため、二面を彫り抜き、石幢から石灯籠に変身させたと考えると、少し謎解きが進む。

5 一畑薬師本坊庭園の橋杭形手水鉢

一畑薬師本坊庭園の本歌取りは、橋杭形手水鉢と三月堂形灯籠組み合わせである。

本歌は京都妙心寺東海庵。

東海庵書院の縁先に据えられた手水鉢と一畑薬師本坊庭園の橋杭形手水鉢を見比べると、まさに本歌と写し。

橋杭を京都から運んできたのだろうか。残念ながら、答えは否。同じ御影石でも若干材質が異なる。石面の風化の度合いを見ると、東海庵の手水鉢は風化が進んでいるが、一畑薬師は石面が平滑。一畑薬師の手水鉢は、京都鴨川の橋杭の転用ではなく、「写し」であると考えざるをえない。

しかし、妙心寺塔頭東海庵と同じ意匠の庭づくりであることに変わりはない。一畑薬師とは、何か特別な関係があるのだろうか。一畑薬師飯塚管長に東海庵の橋杭形手水鉢を見せ、東海庵と一畑寺の関係をお伺いしたら、次のような答えであった。

「一畑薬師は、薬師教団の総本山であると共に、宗派は臨済宗妙心寺派。
東海庵は、妙心寺四派本庵の一つであり、一畑薬師は東海派である。」

修行のため京都妙心寺に出向いた僧が、一畑薬師本坊に帰り、庭づくりの「立石僧」となり、庭を築いている姿が、目に浮かぶようであった。

橋杭形手水鉢を照らすように据えられている石灯籠は、三月堂形。

三月堂形灯籠は、東大寺法華堂(三月堂)前の石灯籠が本歌。鎌倉時代中期の作で重要文化財である。旧暦三月は、春分が終わり立夏を待つ清明の月。三月堂形灯籠と鴨川の水で清められた橋杭で、庭を清めているようである。

橋杭型手水鉢　　右　一畑薬師本坊
・三月堂形灯籠　　左：京都市 妙心寺 東海庵

6 最後に -庭の謎解きは続く-

菅田庵、一畑薬師本坊庭園の魅力は、これだけではない。どちらの庭も京都や江戸の庭づくりの技に加え、出雲の庭づくりの技を兼ね備えている。

まず、出雲の庭づくりで大切にされている陰陽五行。

菅田庵は、いまでは向月亭から茶室菅田庵は建仁寺垣で仕切られた陰と陽の世界。しかし、茶室菅田庵とその庭は不昧公指図で造営、向月亭は不昧公の弟の好みで造営されたという。陰陽の世界を兄弟で造り上げたということか。

さらには、菅田庵まで辿る道筋は不思議なるルート。不昧公は鷹狩りのときなどに立ち寄る茶屋を菅田庵から見えない場所に建てている。そして、菅田庵へ向かうため、茶屋の横から山を掘り割り、道をつくっている。掘割を抜け、右上を見ると菅田庵、まさに「市中の山居」そのものであったのであろう。

菅田庵 庭の境界
・生垣や塀で境界を示さない希有な庭づくり
　周辺の緑を共有⇒市中の山居
・掘割を抜けると菅田庵が一幅の絵
　元の茶畑をめぐり、山道の露地が誘う

なぜ、このような道筋を辿ったのだろうか。小さな谷戸に立地する菅田庵と陰陽五行で大切にする方位を勘案すると、新しい視点からの答えが出ると思っている。当時は当たり前であった家づくり、屋敷づくりのしくみを解明できたらと思っている。

一畑薬師本坊庭園は、いまだ解明できない庭づくりの謎がある。

寺院庭園は南向きの本堂や庫裏の北側に作庭するのが一般的。寺院を訪ねても庭の有無は外から確認できない。

一畑薬師本坊庭園は、これらの庭づくりと大きく異なり、庭は東から南に広がっている。土塀に囲まれ、中門がつくられている。出雲流庭園では、庭を塀で囲み、中門を設えるのが本道。さらには駕籠台、下駄つきなど出雲流の手法を取り入れている。

出雲に寺院庭園では見ることがない庭づくりの手法を取り入れたのは、なぜだろうか。

圧巻は庭木にイチョウやタブノキを取り入れていることである。大木となり、剪定・整枝が難しいと言われ庭木には不向きな木が、庭をひきたてる。天空まで広がる借景をイチョウとタブノキの太い幹が区切り、まるで一幅の絵の様相である。

なぜこのようなデザインの庭をつくったのだろうか。

一畑薬師本坊庭園
・庭の大木 イチョウとタブノキ
　広大な借景を区切り、一幅の絵
・遠近法により
　坐禅石と石塔、駕籠台と飛石を引き立て

庭づくりは、文字を残さない人々が造り上げたもの、その後も多彩な手が入り、も今にいたっている。

菅田庵や一畑薬師本坊庭園も同様である。

如何にして、名園が造り上げられたのか。作庭に携わった人々思いは何か。

これからも調査研究を続け、別の機会に報告することとし、本稿を閉じたい。

以上